

東アジアの都城遺跡を巡る (1)

～国際共同研究「東アジア諸国における都城制および都城に関する比較史的総合研究」を主催して～

橋本 義則 (本学部教授)

はじめに

平成16年(2004)4月から、私を研究代表者として、日本各地の大学で東アジア諸国の都城と都城制に関わる研究を行っている研究者6名、さらに中国・韓国の研究者各2名を加え、計11名で、「東アジア諸国における都城制および都城に関する比較史的総合研究」との課題のもと国際的な共同研究を行ってきた。本研究は、平成16年度から18年度まで三年間、日本学術振興会科学研究費補助金(以下単に科研費と略す)基盤研究(A)の交付を受けて実施された(以下「比較都城科研」と略す)が、これを機会に日本の研究者7名によって東アジア比較都城史研究会を発足させ、東アジア諸国の都城制と都城に関する比較史的な観点からする研究を継続してゆくことになった。

さて、本誌上を借り本号以降数回にわたって、本研究、特に「比較都城科研」によって実施された中国・韓国・ベトナムなどにおける海外調査を中心に、これらの国々における都城遺跡の現況や都城・都城制をめぐる研究の現状などについて記してゆくことにするが、その前に、まず本研究の基となった「比較都城科研」発足の経緯や目的・組織などについて述べておきたい。なお、筆者は既に「共同研究の行方」と題する『日本歴史』特集号で「比較都城科研」について概述したことがあり、それと重複する所があることをあらかじめお許しいただきたい。

(1) 研究の経緯

そもそも本研究は、東アジア諸国の都城と都城制を研究対象にしている我々が、みずからの研究対象である各国の都城と都城制についてよりよく理解し研究を進めるために、研究対象とする国の枠を超え、東アジア諸国における都城と都城制について、あらかじめ多様な課題を設定し、比較史的視角から具体的・基礎的に、また徹底的に検討すること、しかも個々の都城の人文・地文に見られる共通性と差異性も認識するために、中国・韓国・ベトナムなどの東アジア諸国にある都城遺跡の共同調査とこれらに関する国際的な共同研究を併せ行いたいと考え、東洋史研究者である妹尾達彦(中央大学・中国中世史)・田中俊明(滋賀県立大学・朝鮮古代史)両氏に諮り、三人で研究組織の構築をめざしたもので、それから既に六年以上が経過していた。そしてようやく平成16年度に科研費の交付を受けることができ、共同研究が現実のものとなった。そしてこの度の科研費交付決定と同時に、上述したように、研究代表者と研究分担者の7人で東アジア比較都城史研究会(代表:妹尾達彦、幹事:新宮 学・橋本義則)を発足させ、継続的な研究活動を開始することになった。

(2) 研究の目的—比較研究—

周知のように、日本・中国・韓国、そしてベトナム等の東アジア諸国は、今日に至るまで政治・文化・社会などの様々な点で共通する要素を持っているが、その淵源の多くが歴史的に中国に求められることは今さら言うまでもない。そのような中国の影響を受けた周囲の国々において政治制度として出現したのが都城であり、都城制である。

都城は、いうまでもなく世界史的な概念である都市とは異なり、東アジア諸国において現出したもので、その源は中国にある。中国の都城は古く商周あるいはそれ以前に起源を持ち、都城建設の技術を洗練させながら、また、北方遊牧民の文化的影響も受けつつ、近代に至るまで王朝の首都などで維持されてきた。朝鮮あるいはベトナムなど王朝が成立した諸国においても同様に近代に至るまで都城は維持された。これらの諸国においては地中に埋もれた都城遺跡ばかりでなく、実際に地上に遺る遺構を実見した上で文献史料と照合しながら様々な検討を加えることが可能である¹。これに対して日本やかつて中国東北地方に存在した渤海などでは古代の終わりとともに都城及び都城制は崩壊し、今日では地中に埋もれているため、発掘調査によってはじめてその遺構を目にすることが可能となる²。このように様々な形で遺存する東アジア諸国の都城については、それぞれの国の歴史を専門とする歴史研究者や考古研究者によって研究や調査が進められ、注目すべき成果を挙げつつあり、特に独立行政法人文化財研究所の奈良文化財研究所では中国・韓国など海外の考古・文化財関係諸機関と研究交流を行い、また考古学研究者らを招いて東アジアの都城を比較する国際的検討会や公開講演会などが行われたこともあった³。しかしそれらは、東アジアという中国を中心とした世界の中に置いて都城と都城制を具体的かつ徹底的に比較検討する視点がまだ不十分であり、共通の課題を設定しない個別分散的な研究にとどまっていると言わざるを得ない。

さて、東アジアから都城制あるいは都城を見ると、これらの諸国では共通の要素をそこに見出しうるとともに相違点、すなわち各々に独自の点を見てとることが容易に出来る。中国の影響を受け周囲の国々で成立・展開した都城制・都城が必ずしも中国のそれをそのまま受け容れたわけではなく、それぞれの国の歴史・文化・社会、あるいは政治的成熟度などによって様々な受容の在り方を示した。東アジア諸国に共通する政治制度でありながら多様な展開を遂げた都城制とそれに基づき実際に建設された個々の都城について、その歴史的諸要素、たとえば個々の都城を存立せしめている当該国の政治制度・社会状況あるいは文化基盤など、さらに都城を構成する諸要素、都城と自然環境・風水、宮城と皇城など都城の平面・空間構造と儀礼・政務、あるいは市と獄、流通体系など社会・生活の諸相などに分け、詳細に各国間の異同を比較検討し、具体的な共通点と相違点を逐一確認すること、すなわちこれらの国々における政治・文化の受容と変容に関する具体相を明らかにすることが本研究の主眼である。その上でさらにそのような共通点と相違点を生み出した東アジア諸国の実態に迫って行きたいと考えている。従来、ともすれば陥りがちな抽象的比較史ではなく、都城制及び都城を具体的に比較するとともに、

注

- 1 例えば、中国北京の故宮、韓国ソウルの李朝の諸宮、ベトナムフエの都城・紫禁城など、近世の都城と宮城・皇城がこれに当たる。
- 2 日本の古代都城遺跡には「藤原」・平城・難波・恭仁・長岡・平安などの諸京があり、渤海では上京龍泉府・中京顕徳府をはじめ五京が地上あるいは地中に遺跡として残る。
- 3 奈良文化財研究所が実施した検討会の成果をまとめた図録としては『日中古代都城図録 奈良文化財研究所創立50周年記念』奈良文化財研究所史料第57冊、2002年、研究成果としては『東アジアの古代都城』研究論集XIV、2002年、などがある。

それを通じて具体的に東アジアの歴史を把握する比較史を実現させたいと考えている。

(3) 研究の組織—国際共同研究—

本研究における研究組織の構築については、既に述べたように、妹尾・田中両氏に諮って行ったが、その際特に留意したのは、都城制と都城をキーワードとして、第一に、東アジアを研究対象とする国内歴史研究者の共同研究体制の構築、そして第2に、国際的な共同研究体制の構築であった。

表1のように、前者については、日本史研究者は研究代表者の私だけで、研究分担者として妹尾・田中両氏を含め東洋史研究者5名と考古学研究者1名から構成した。そして一応地域によって3班（日本班2名・中国班3名・朝鮮班2名）に分け、調査と研究を進めることにした。また後者は、中国から中国社会科学院考古研究所の2名（夏商都城研究者と隋唐洛陽城研究者）、韓国からは韓国国立慶州文化財研究所・忠南大学各1名（新羅都城研究者と百濟都城研究者）を海外研究協力者に据え、研究会での研究報告と、海外調査での調査への協力と共同調査そのものへの参加を主にお願した。ただ研究協力者以外にも国内外の都城研究者を随時招き、研究会での研究報告と討論を行うこととした。実際、研究分担者や海外研究協力者以外に、中国・韓国から各1名、またベトナムからも中国社会科学院考古研究所の研究者2名を招請し、また国内からは2名の研究者から自費による参加などがあった。

なお本研究の研究分担者でもある妹尾達彦氏が代表を勤める日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)「歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」(以下「都市環境科研」と称する)とは研究組織の面のみならず、後述するような海外共同調査などの諸点においてきわめて密接な連携のもとで研究を進めた。

表1 研究組織

役割分担	氏名	所属	専門
研究代表者	橋本 義則	山口大学	日本古代史
研究分担者	馬 彪	山口大学	中国古代史
	妹尾 達彦	中央大学	中国中世史
	新宮 学	山形大学	中国近世史
	田中 俊明	滋賀県立大学	朝鮮古代史
	桑野 栄次	久留米大学	朝鮮近世史
	山中 章	三重大学	日本歴史考古学
海外研究協力者	許 宏	中国 中国社会科学院考古研究所	中国夏商考古学
	陳 良偉	中国 中国社会科学院考古研究所	中国隋唐考古学
	朴 淳發	韓国 忠南大学校	韓国百濟考古学
	李 恩碩	韓国 国立慶州文化財研究所	韓国新羅考古学

(4) 研究の方法—国際共同研究会と海外調査—

本研究における研究方法の柱は、既に述べた国際共同研究会の開催と海外調査の実施の二つにある。まず、研究会は年平均二ないし三回開催し、研究代表者および分担者が関心を持つ都城制と都城に関する課題を提示し、研究会では、それを順に共通の課題に設定して、毎回各自の専門とする地域と時代に

ついでに課題に迫る研究報告を行うことを義務づけた。表2にあるように、今回の科研では三年間に「羅城をめぐる諸問題」「都城と墓地」「都城と禁苑・苑池」「都城を繞る壇廟」の四つの課題を取り上げ、一つの課題についておおよそ二回の研究会を行い、毎回研究会では二日間に亘って全員が研究報告を行うとともに、時間を忘れて非常に活発な議論が行われた。また併せて海外より招聘した海外研究協力者等も専門の地域と時代の都城制と都城に関する研究報告を行った。

今後、さらに共同研究を続け、都城の街区、特に条坊制の問題やそれを構成する諸要素（市や獄、寺院・道観、貴族の邸宅や庶民の家など）、宮城の構造やそこにおける政治や儀礼の問題などを取り上げて比較研究を進めてゆきたいと考えている。今回の三年間の科研で様々な機会を通じて得られた研究者間の共同研究意識をさらに高め、共同研究をより具体的に、そしてより徹底的に進めてゆきたい。

表2 共同研究会開催

年度	回次	共通課題	開催年月日	海外研究協力者等
16	第1回	羅城をめぐる諸問題	16.7.18	中国2名・韓国2名
	第2回		17.2.24・25	
17	第3回	都城と墓地	17.7.23・24	中国1名 日本人1名
	第4回		18.1.5・6	
18	第5回	都城と禁苑・苑池	18.2.25・26	在中国日本人1名・日本人1名
	第6回		18.8.17・18	
	第7回	都城を繞る壇廟	19.1.5・6	韓国1名・日本人1名 韓国2名・ベトナム1名・在ベトナム日本人1名・日本人2名
	第8回		19.3.3・4	

次に、海外調査は、共同研究に参加した研究者の専門とする地域と時代を超え、古代から近代に至る都城について、共通の認識と相違を実地で具体的に確認するため、三年の研究期間の最初の二年間に集中的に行った。海外調査に当たっては各研究班で交渉を担当した研究者と海外研究協力者の協力を得、現地の研究者や発掘調査の担当者と密接な連絡をとるとともに、現地において関係機関・諸氏と協力関係を築き調査を実施した。表3のように、16年度は古代から中世を中心に5回、そして17年度がこれに

表3 海外共同調査(1) 「比較都城科研」主体調査

年度	回	期間	対象		主な調査協力機関	海外研究協力者等の参加	備考
			国時代(王朝等)	都市			
16	第1回	16.8.17~31	中国 古代~近世(隋唐・明清)	南京・杭州・揚州・蘇州・成都等	南京大学・成都市社会科学院		
	第2回	16.9.3~13	韓国 古代・近世(百済・朝鮮)	公州・扶余・ソウル等	韓国国立文化財研究所・扶余文化財研究所		共同調査
	第3回	16.10.26~11.4	中国 古代・近世(高句麗・清)	桓仁・集安・瀋陽等	撫順市博物館		共同調査
	第4回	16.12.24~29	中国 中世(隋唐)	西安	西北大学		
	第5回	17.3.9~31	中国 中世(秦漢隋唐・遼元)	西安・洛陽・シリンホト・赤峰等	社会科学院考古研究所・陝西省考古研究所・西安市文物保護所・西北大学・陝西師範大学		一部共同調査
17	第6回	17.8.17~31	中国 近世(金元・明清)	北京・南京・鳳陽	故宮博物院・南京大学・鳳陽県		共同調査
	第7回	17.9.14~22	中国 中世(渤海)	吉林・延吉等	吉林大学	中国1名 中国1名・韓国1名	共同調査
	第8回	17.11.22~12.9	ベトナム 古代~近代	ハノイ・フエ等	社会科学アカデミー考古研究院・フエ保存修復センター		共同調査
	第9回	18.3.9~22	韓国 古代(新羅・伽耶)	慶州・大邱等	慶州文化財研究所・慶州国立博物館・大邱国立博物館・昌原文化財研究所・慶北大学・釜山大学		共同調査

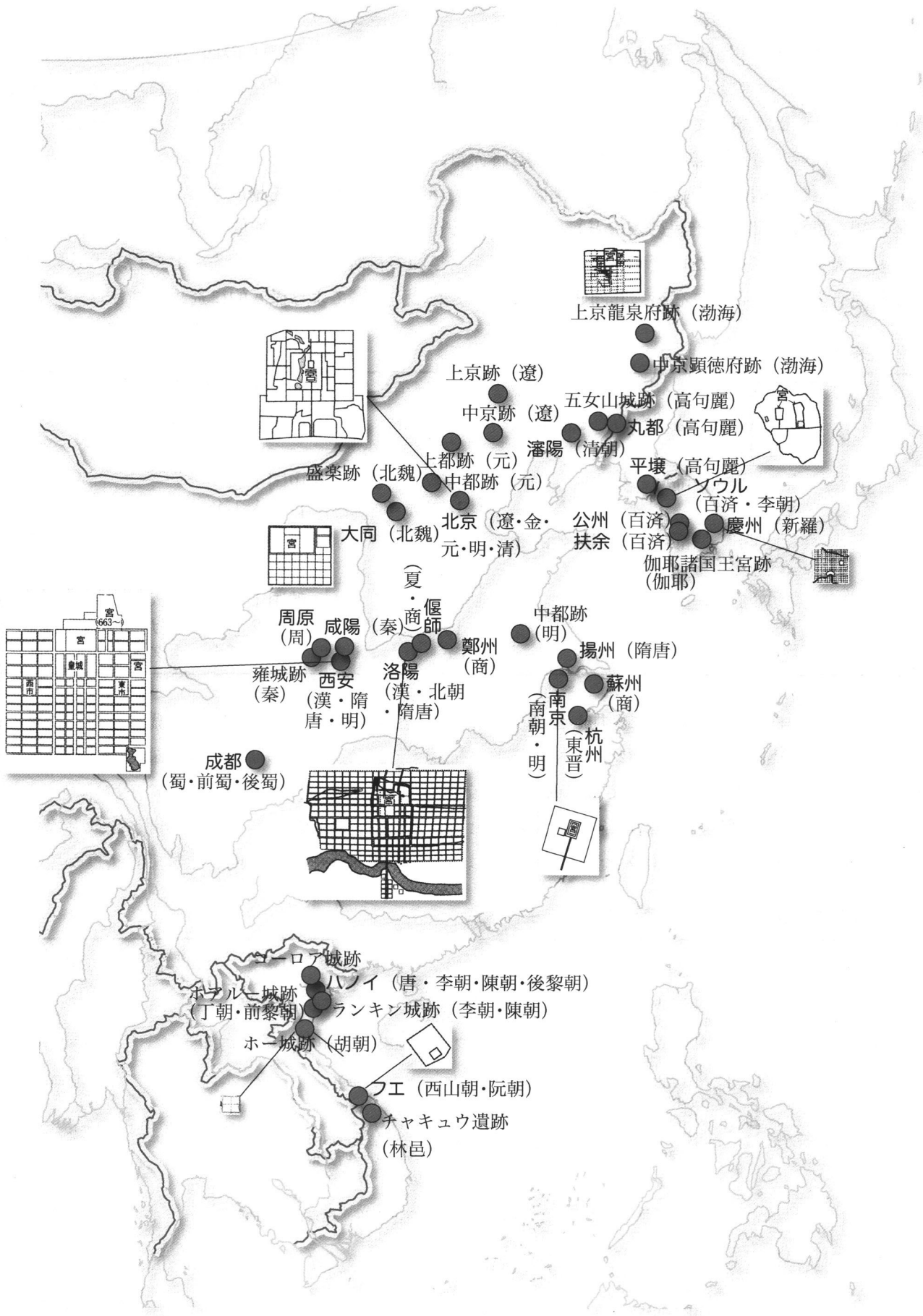


図1 調査を実施した東アジアの都城遺跡と都城遺跡所在都市

表4 海外共同調査(2) 「都市環境科研」単独調査

年度	期 間	対 象		主な調査協力機関
		国 時代(王朝等)	都 市	
17	17. 4.27～ 5. 4	北朝鮮 古代(高句麗)	平壤	なし
18	18. 9.17～26 19. 3. 9～22	中国 中世(鮮卑) 中国 古代・中世(秦漢隋唐)	張家口・大同・フフホト等 西安	北京大学・内蒙古師範大学・大同市文物局 陝西師範大学・陝西省考古研究所・西北大学

近世・近代を加え4回実施したが、そのほとんどは「都市環境科研」との共同調査であり、効率的・効果的に調査を終えることができた。また「都市環境科研」の研究分担者でもあるものは表4に掲げた「都市環境科研」単独の海外調査にも参加し、特に本科研だけでは費用の点でも、また日程的にも難しかった北朝鮮での高句麗平壤城と関連遺跡の踏査が可能となった。そして18年度においても二度の海外調査を実施することができた。図1に調査した都城遺跡と都市を示したが、海外調査を実施した地域は、中国・韓国はもちろんベトナムや北朝鮮にもおよび、貴重な調査とそれに伴って大量の写真を撮ることができ、記録としてもまた体験としても重要な資料を得ることができた。

(5) 研究の成果

本科研の研究成果は現在報告書にとりまとめ中で、まだまとまった形での研究成果を世に問うには至っていない。しかし研究成果の一部は、既に平成17年2月「都市環境科研」によって開催された国際シンポジウム「東アジアの都市史と環境史—新しい世界へ—」での研究報告や予稿集への論文執筆として行われており、また「都市環境科研」で刊行された雑誌『歴史と環境』の第三号を、本科研の研究会で共通課題として取り組んだ「都城と葬地」をテーマとする特集号とし、本科研の研究分担者が研究報告の内容に基づいて論文を執筆した。

科研の終了時に作成が義務づけられている報告書(研究会で採りあげた共通課題に関する研究発表をまとめたもの)は現在鋭意作成中であり、今回新しい試みとして紙媒体による報告書の作成は限られた部数にとどめ、頒布用の報告書はPDF形式の電子ファイルとすることにしている。これは私が平成9～12年度まで「宮都空間の歴史の変遷を通じてみたる日本古代後宮制度の基礎的研究」の課題で交付を受けた科研費基盤研究(C)(2)の報告書で行った電子ファイルでの報告書作成の試みをさらに発展させ、調査で撮影した写真などの資料も収録し、広く活用していただくことを念頭に置いたからである。さらにそのうち、一年ほどの猶予をおいて今回の科研における共同研究のあり方に基づいて、四つの課題を取り上げた論文集の刊行を計画している。

(6) 残された課題と今後の展望

東アジアの都城・都城制を対象とする場合、まず中国の影響を強く受けた地域は勿論、その周囲のアジア諸地域、特に中国北方の遊牧国家や東南アジア・中央アジア諸国との比較が不可欠であり、さらにはヨーロッパ諸国の歴史的な都市、特に城壁で囲まれた都市との比較も今後大きな課題となってくる。国際的な比較的共同研究を目指す上で、今回の科研では日本人研究者の海外調査とこれへの海外研究協力者の参加を実現し、国際的な共同研究を行うための一つの基盤、特に継続的な研究を行う上での研

究者間の信頼関係が生まれたが、残念ながら海外調査に重点を置いたため、海外研究協力者たちとの日本の都城遺跡に関する共同調査は叶わなかった。より国際的な共同研究を実質化させるためには、ぜひ今後日本の都城についても海外研究協力者等との共同調査と討論が必要であると考えます。

今後、国際的な共同研究を実質的なものとするために、日本と中国・韓国・ベトナムなどの研究調査機関や研究者との実効的な交流とそのための組織化が急務である。特に東アジア各国に現存する都城遺跡の保護・保存を視野に入れた共同研究が必要である。昨夏訪れた中国安徽省鳳陽県にある明の中都跡では、現地で長く調査を続け保存事業を推進してきた方々の案内で遺跡を踏査し、まだ手つかずの状態に残る遺構があることを確認したが、中国では現在開発が急速に大陸沿岸部から内部に及んでおり、明中都跡にも早晚及ぶ可能性が高いし、明中都跡で崩れつつある遺構のために進められていた保存・整備にも問題点が多く、同じような状況は世界遺産に指定され大規模な研究と修復が進むフエを除く、ベトナムの多数の都城遺跡などにも見られる。このような状況の中で、都城制と都城の共同研究は東アジアを貫く歴史研究として重要であるとともに、研究と調査の交流と組織化を通じて日本の国際貢献が可能であると考え、本科研を基に、東アジア比較都城史研究会によってそのような共同研究の進展を図りたいと考えている。